

冰心の早期の 問題小説

女性の 死 がもたらす意義

虞 萍

Early Stage of Bingxin's "Problem Novel":

The Significance of Women's Death

YU Ping

Abstract

A desire for national revolution grew in the mid 1920s, during which period Jiang Guangci criticized Bingxin's novels as lacking social consciousness. However, I argue that Bingxin's novels contain a strong social consciousness. To analyze this social consciousness, I looked at the works *Autumn Wind and Rain Make One Melancholy*, *Zhuang Hong's Sister*, *Last Rest in Peace* and *Who Killed You*. In these novels, all the main female characters "died". Through the female "death", Bingxin's works reflected the reality of her generation, which was dominated by the May 4 Movement. Moreover, in female "death", Bingxin stressed women's dignity and the importance of women's education.

はじめに

1920年代中頃、国民革命の気運が高まっていたころ、蔣光赤（1925）は、冰心を「お嬢様の代表」と呼び、彼女を次のように痛烈に批判している。「冰心はいろいろ触れたが、家庭から一歩も踏み出ることができない。（中略）国家、社会、政治であれ（中略）彼女に関係がない、彼女は本来これらのものを必要としない。彼女は弟、妹、母あるいは花の香り、海の笑いだけで充分である。我々が今必要としている文学者はこんなものではない。」しかし、言うまでもなく、家庭は社会の一部である、冰心作品の源は自分が経験したこと（「事実小説」、冰心1919a）あるいは自分が回りの人々から聞

いた話、周囲の社会に発生していたことである。冰心（1979b）は、身の回りの社会の問題を取り上げていた。彼女は、「私は自分が見た、聞いたさまざまな問題を、小説の形で書いた」と回想している。

当時大学生であった冰心は女性が職業を持つことを呼びかけなかったが、しかし彼女は教育の大切さを感じ、特に女子教育に熱意を持った。

本稿では、冰心が作家として注目される前の早期の 問題小説¹「秋雨秋風愁殺人」（「秋雨秋風人を愁殺す」）、「莊鴻の姉姊」（「莊鴻の姉」、冰心1920a）、「最後の安息」（「最後の安らぎ」冰心1920b）、「是誰断送了 you」（「誰がお前を殺したんだ」、冰心1920c）を取り上げ、蔣光赤が冰心に対する評価を

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程

問いただし、すなわち冰心の社会性を考察する。またこれらの小説の中で、冰心は女性主人公になぜ生きる道を与えなかったのか。これらの 問題小説 を通して、冰心は人々に何を伝えようとしているのか。冰心が女性問題を解決しようとする場合、自分なりの解決法がどのようなものであったのかを考察したい。

・「秋雨秋風愁煞人」

冰心(1919a)は1919年10月30日 - 11月3日に、北京の『晨报』に「秋雨秋風愁煞人」という「事実小説」を発表した。「秋風秋雨愁煞人」は秋瑾の辞世の句であるとよく認識されるが(盛英編1995: 50、郭俊峰、王金亭主編1997: 185 - 189)、黄嫣梨(1994: 149)によれば、「秋風秋雨愁煞人」は最初清嘉慶道光年に、松陶澹人の「秋暮遣懷」(『滄江紅雨樓詩集』所収)という詩の中で用いられた。また、黄嫣梨は本来の「秋風秋雨」を「秋雨秋風」に改め、悲哀を強めた、と考えた。筆者もこの解釈に賛同するものである。冰心はこの小説で、「煞」を「殺」という字に替えた。「煞」は「殺す」という意味があるが、「殺」という字の方が「殺す」という意味をもっと直接的に、明白に表わす。この「殺」という字で、冰心は女性主人公英雲の運命に共感する気持を明確に表わし、読者に女性問題に注目して欲しいという強い願望を表現する。

冰心の友達英雲は女学校から夏季休暇のため帰省して、一週間も経たないうちに両親によって、結婚相手を決められ、婚期まで決定された。英雲の初志は大学を卒業して、祖国に貢献することにあつた。しかし、この「包辦婚姻」²によって、夫の母に進学

を阻止され、大学教育を受ける夢は壊された。英雲の両親は相手の家(伯父の家)が裕福であるため、娘の将来は安泰だと思い、この婚姻に大変満足していた。英雲は結納も済んでしまったので、結婚を取り消す余地もないと考え、両親によって決められた人生に従うことにした。彼女は両親が勝手に決めたこの結婚において、まったく反抗をしないで、ひたすら泣くばかりであった。

当時女性に限らず、男性も「包辦婚姻」の対象であった。中国の男性作家魯迅(1881 - 1936)、胡適(1891 - 1962)、茅盾(1896 - 1981)も「包辦婚姻」の犠牲者である(劉青峰編1994: 169 - 190)。1921年、陳鶴琴は学生の婚姻に関する意識調査報告「学生婚姻問題之研究」(「学生婚姻問題の研究」)で、調査した男子学生631人のうち、既婚者は184人(29.16%)で、そのうち自分で結婚を決めた者はわずか6人に過ぎず、両親が決め、本人が同意した者は6人で、両親が決めた179人のうち、結婚前、妻となる女性を知っていた者は41人で、あとの138人は全く知らなかった、という結果を得た(中山義弘訳1982a: 20 - 22)。すなわち、自分で自由に結婚できる女性もほんの一部にしかすぎないし、また両親に決められた結婚に従い、結婚する前に夫を知らない女性がほとんどである。表1の「婚姻改善意見表」に示したように、青年が最も希望している婚姻制は、自由婚姻制であり、両親に結婚を決めて欲しい人はわずか1.09%にしか過ぎなかった。未婚者259人の中で、自由結婚を希望している者は171人(63.53%)で、青年が交際の自由を希望している状況が見られる(中山義弘訳1982b: 34)。

当時、『新青年』、『新潮』などの雑誌にお

表1 1921年のアンケートによる婚姻改善意見表

事項	回答数	比率(%)
自由婚姻制	66	35.87
双方同意制	39	21.19
晩婚	20	18.69 (正しくは10.87)
経済的自立後の結婚	8	4.34
女子教育の改善	8	4.34
学校卒業後の結婚	6	3.25(3.26)
社交の公開	6	3.25(3.26)
婚礼の簡素化	5	2.71
教育を改善し、男女が尊敬しあう習慣を養う	5	2.71
男女がまず交際する	4	2.12(2.17)
男女共学	3	1.63
結婚後、両親とは別居する	2	1.09
学識と容貌は同等である	2	1.09
離婚の自由	2	1.09
婚約解消の自由	2	1.09
両親が代って結婚を決める	2	1.09
再婚しない	1	0.54
自由離婚には応じない	1	0.54
性格と学識には同等である	1	0.54
両親が代って結婚を決め強いることを禁止する	1	0.54
合計	184	100

(出所) 陳鶴琴1921b (中山義弘訳1982b : 24)

いて、「万悪の旧家庭」を批判する文章がしばしば見られた³。青年は「旧家庭」に対して逃亡、屈服あるいは自殺という3つの道を選ぶ、と言われた(清華大學中央党史教研組編1979 : 310)。英雲は両親に屈服したが、自殺する女性も少なくはなかった。最も有名な事件として、湖南長沙の花嫁趙五貞が輿の中で剃刀で咽喉を切って自殺してしまったということがあった。この事件は社会で大きな反響を起し、長沙の『大公報』はこれについて数多くの文章を発表した⁴。

逃亡、屈服と自殺以外、「旧家庭」に全く麻痺している青年もいる。「秋雨秋風愁殺人」の中の英雲の友達雅琴は、包辦婚姻に対して何も反対せず、英雲に同情する気持ちすら持たなかった。また英雲の嫁ぎ先は、贅

沢費と接待費、お寺への献金の家計の出費のほとんどを占める。姑(叔母でもある)は英雲に麻雀と飲酒をたしなむように勧め、服装も指図し、厚化粧を要求した。英雲の嫁ぎ先は裕福であるので、英雲に教師になって家族を養うのを望まず、英雲の勉学を阻止させる。またこうした考えは家の全ての子どもたちにも及んでおり、彼らは家塾で漢文を少し読み、詩詞歌賦を習っても、新しい知識、世間のことは何一つ知らない。しかし、彼らはこれについてまったく自覚していなく、裕福な現状に満足している。

英雲はこのような「旧家庭」で生活するのに息苦しく感じていた。彼女は十数人のいところに新しい知識を教えようとしたが、相手にされなかった。彼女はとうとう諦め、自分の将来まで不安に陥る。英雲は「旧家

庭」に呑みこまれ、圧倒されていた。また、同級生の淑平は、夜中に起きて復習をしたのが原因で、病気でなくなった。ここには、女性が勉強するための環境が十分に整っていない状況の中で、女性が勉学のため犠牲になるという問題が提起されている。冰心は小説の中で淑平の「肉体的な死」を背景とし、英雲の「精神的な死」を浮び上げさせた。英雲は生きていとは言え、自分の人生を自分で決めることができない。彼女は他人の意志で行動しなければならないので、まるで死に直面したように悲哀に陥る。

この小説の中で、冰心は「包辦婚姻」によって教育を受ける権利を失う英雲に同情した。彼女が重視する「包辦婚姻」が英雲を害したことよりも、むしろ教育の権利を奪われた女性の悲しみであろう。冰心のこのような考え方は、彼女の両親の結婚と関連があると思われる。冰心の母が9歳、父が14歳の時、祖父たちは詩を作り彼らの結婚を決めた、すなわち「包辦婚姻」である。冰心の母は19歳の時に謝家に嫁として行き、婚後の両親は相思相愛であった（冰心:1979b）。極身近にいる仲の良い両親を見て、冰心は「包辦婚姻」を深刻に批判しなかった。それよりも、この「事実小説」を通して、冰心は女性教育の大切さを社会に訴えていると思われる。

冰心は「秋雨秋風愁殺人」に続き、「莊鴻的姊姊」でも女性の悩みを注視する。

・「莊鴻的姊姊」

1904年、「奏定学堂章程」が公布され、中国近代学校制度が発足した（虞2004：31 - 50）。とは言うものの、女性はさまざまな原因で学業を断念させられる。冰心の 問題

小説「莊鴻的姊姊」に登場する莊鴻の姉は、両親がなくなったため、弟と一緒に叔父の家に住み始めたのが事の発端であった。小学校教員の伯父の給料が延滞され、祖母は年寄りで家事を手伝う人がいない。それに祖母は女性が高学歴を持つ必要がないと思ったため、莊鴻の姉は学校を辞めさせられる。そのため、莊鴻の姉は希望を失い、憂鬱になり、だんだん痩せて、絶望のあまり、とうとう命まで落す。

当時多くの知識人は、教育を受けることは女性の正当な権利であり、女性解放の一つの重要な条件であると考えた⁵。この作品の中で、冰心は莊鴻の姉の死の社会的根源を述べていないが、しかし莊鴻の口を借りて、当時の中国社会の三つの問題を提起している。すなわち、一、なぜ兌換券が暴落してしまったのか。二、なぜ教育予算が遅れてしまったのか。三、なぜ女性が教育を受けなくてもいいのか、である。

まず第一の問題について言えば、表2に示したように、清末・民国初期における中央政府の軍事支出費は年々高くなっていった。表3に示したように、中央政府の総支出中に占める軍事費の割合は大変高かった。そのため、兌換券が暴落し、冰心が小説で描いたように、教師の給料にまで影響を与えたと思われる（韵如1923）。

第二の問題については以下のような社会状況があった。1914 - 15年における袁世凱の帝制復活をめぐる国内の争乱、その後の政治混乱、軍閥の混戦から、1927年北伐と相次ぐ内乱は、教育をめぐる条件を一層悪化させた。1916年、李廷幹（舒新城1920：117）は「危哉小学校教育之前途」（「小学校教育の前途の危機」）で、次のように述べて

表2 清末・民初における中央政府の軍事費支出状況 1893 - 1925年

年次(年)	軍事費(元)
1893	25,504,880
1901	47,055,000
1910	102,000,000
1911	130,870,755
1916	152,915,765
1918	203,000,000
1925	600,000,000

(出所) 初出は中国科学院経済研究所編1968: 603。底本は阿部洋1993: 239。

表3 民国初期における中央政府の総支出中に占める軍事費の割合 1912 - 1923年

年次(年)	軍事費の割合(%)
1912	33.87
1913	26.89
1914	38.08
1916	33.81
1919	41.68
1923	64.00

(出所) 初出は中国科学院経済研究所編1968: 608。底本は阿部洋1993: 239。

表4 1928年江蘇省各省⁶における小学校教師の最低月給

最低月給額(元)	県名	県数
3	肅県、宿遷	2
4	崇明、宜興	2
5	沛県、泰県、碭県	3
6	東台、漣水、灌雲、金山、高淳、邳県、江陰	7
7	豊県	1
8	泗陽、興化、南通、淮安、塩城、靖江、泰興、奉賢、無錫	9
10	鎮江、揚中、海門、準寧、阜寧、太倉、松江、溧水、崑山、呉県、常熟、溧陽	12
12	武進、川沙、江都、江浦、溧陽、南匯、江寧、呉江	8
14	宝山、儀徴	2
15	句容、嘉定	2
16	高郵、宝応、金壇、青浦、丹陽	5
20	如皋、上海	2
合計		55

(出所) 初出は古樸編著1936。底本は影印本『民国叢書』編輯委員会編1992: 375。

いる。「わが国の小学教員が、かつてよくその任務を全うすることができたのは、何よりもまず、その生活を維持することができたからである。現在は生活を維持することさえ不可能になっている」。1920年の田廣生の報告によると、小学校教員の月給は多いもので10数元、少ないもので5 - 8元で、月給50 - 60元に達するのは大都会の極少数の教員のみである。江蘇省南部の無錫・上海・江寧・呉縣などでは月給が15 - 16元を超えるものが40 - 50%を占め、その他の縣では12 - 13元程度の者が80%あまりを占めている。教育が発達していると称している

南通・如皋は月給7 - 10元の者が約80%を占め、淮安・揚州・徐州・海安では月給4 - 9元の者が75%以上を占めている(小林善文1986: 720)。舒新城(1972: 73 - 74)によれば、1918年湖南省では、教育経費は10ヶ月分も未払いである。1920年頃の湖南省のある県では、県立高等小学の教員の平均月給は14元、区立で12元、初等小学の場合は、県立で12元、区立で10元であったが、これは上海の人力車夫の月給にも及ばない(舒新城1972: 54 - 55)。表4は1928年の江蘇省の事例であるが、小学の教員の給料が低いという状況はその後にも続いて、さら

に悪化したことがわかる。

第三の問題の背景は以下のようである。清末の思想界に大きな影響を与えた啓蒙思想家、ジャーナリスト、学者である梁啓超（1873 - 1929、1936：42）は女性の知力は男性に劣らないが、ただ教育を受ける権利を奪われたことによって、知力が男性に及ばないように見えると言う。また女性がいったん教育を受け、知力が開発されると、「往々にして男性の究めることのできない道理を婦人が究め、男性の創出できない方法を婦人が創出する」と述べている。近代の著名な民主主義革命家、中華民国初代教育総長蔡元培（1868 - 1940）は、1912年に臨時教育会議を招集し、教育の目的・内容における儒教主義的色彩の払拭、国民教育主義の実現、教育における男女差別の撤廃という方針を打ち出した。とは言うものの、1912 - 1915年女性の就学比率は減り、全体

の学生数の5%にも及ばない（虞2004：34）。また表5に示したように、中国全体の義務教育の普及率も低いのである。

仮に冒頭で紹介した蔣光赤（1925）の言葉の通り、冰心は社会を見ていないのが事実であるならば、冰心は莊鴻の口を借りて、当時の中国社会の以上の三つの問題を提起することが不可能であろう。冰心は中国の教育状況に不安を持ち、特に女性教育の緊急の必要性を訴えている。中国の男女平等思想の萌芽は、もっとも早期には明朝中後期にみられるとは言え（中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳1995：11）、民国時期の中国は男女平等には程遠い。小説の中の祖母は莊鴻に、次のように述べている。「あなたの姉さんは女なのに、あんな高学歴を持ってどうするの。あなたたち男は、将来官僚になれるから、当然勉強をしなければならぬよ。」冰心は祖母の口を通

表5 1916年中国各省における義務教育の普及状況

順位	各省区	人口(人)	学齡児童(人)	入学児童数(人)	入学率(%)
1	山西	12,200,000	1,220,000	69,913	57.37
2	広西	5,140,000	514,000	144,357	28.09
3	浙江	11,580,000	1,158,000	282,510	24.39
4	京兆及び直隸	20,930,000	2,093,000	489,396	23.38
5	東三省	15,000,000	1,500,000	325,835	21.72
6	陝西	8,400,000	840,000	136,756	16.28
7	江蘇	23,980,000	2,398,000	320,436	13.36
8	雲南	12,720,000	1,272,000	166,916	13.12
9	山東	38,247,900	3,824,790	476,182	12.45
10	湖南	22,169,000	2,216,900	204,349	9.22
11	河南	25,317,000	2,531,700	223,383	8.82
12	四川	68,700,000	6,870,000	470,213	6.84
13	貴州	7,650,000	765,000	50,129	6.55
14	湖北	35,280,000	3,528,000	208,358	5.90
15	甘肅	10,386,000	1,038,600	60,503	5.25
16	広東	31,865,000	3,186,500	167,950	5.20
17	江西	26,532,000	2,653,200	112,819	4.25
18	福建	22,870,000	2,287,000	87,169	3.85
19	新疆	1,200,000	120,000	2,988	2.49
20	安徽	23,670,000	2,367,000	53,672	2.27

(出所) 陳宝泉「中国之義務教育」(舒新城編1928：57 - 58)

して、教育における男女の不平等さを指摘している。1919年10月30日 - 11月3日に発表されている「秋雨秋風愁殺人」は事実小説であったため、冰心は教育の権利を奪われた女性主人公英雲の「精神的な死」で止まっていた。しかし、1919年12月17日に書いた「荘鴻的姉姊」は純粋な虚構小説であるため、冰心は教育の権利を奪われた女性主人公荘鴻の姉を死なせた。荘鴻の姉は勉強の権利を奪われたため、憂鬱になり、亡くなってしまう。人は夢を失うと生き甲斐がなくなり、生命の鼓動が衰弱してしまう。この生命の鼓動は人の脈のようであるため、生命の鼓動がなくなると、その脈拍が止まり、心臓も停止して、死んでしまう、と冰心は考え、荘鴻の姉を死に導いたのではないだろうか。

この小説はいわゆる「入れ子式」の手法を採っているのであり、「現実」と「虚」といった対照的な描き方を用いている。冰心はこの小説の中で、荘鴻を語り手とし、姉の物語を語らせる。しかし、この語り手荘鴻は姉の死に戸惑っている。夏休みに、まだ普通に会話していた姉が、9月に亡くなる。祖母と叔父が荘鴻に姉の死をずっと知らせることなく、この事実を隠していた。正月に家に帰った荘鴻はやっと姉の死を告げられる。荘鴻は姉の死を知って、悲しみにくれ、真っ暗な地獄の底に落ちたようで、

これが夢であることを祈った。荘鴻は突然聞き手を訪問して、姉の死を告げ、そのため小説の中の聞き手（弟と私）の動揺は隠しきれない。荘鴻の姉の死に対して、物語内の人（小説の中の人）ですら戸惑うなら、局外人（読者）はもっと謎に包まれた気持ちになる。

表6に示したように、本来生きている人間（荘鴻、弟、私）は現実の世界（真の世界 = 生）にいる、死んだ人間（荘鴻の姉）はよその世界（虚の世界 = 死）にいるはずである。しかし、語り手荘鴻の姉の死への疑いによって、小説の中の生きている人間（荘鴻、弟、私）は一瞬よその世界（虚の世界 = 謎、虚）にいるようになる。生きている人間の世界がよその世界に喩えられるなら、死んだ人間（荘鴻の姉）の世界はまさに真の世界になる。荘鴻の姉の死は事実であるため、これが現実の世界になる。

冰心はこの小説の中で、語り手荘鴻が姉の死に対する疑いを原点に、聞き手たちを自然に「虚の世界」へと導く。この「虚の世界」に対して、荘鴻の姉の死が事実であるため、死んだ人間の世界が「現実の世界」になる。そのため、生きている人間と死んだ人間の世界が一瞬逆転する。小説の中の全ての登場人物の戸惑い（すなわち、一、祖母と叔父は荘鴻が悲しむのを恐れて、荘鴻の姉の死を語るのを避けていた。二、語

表6

本来		小説の中	
生きている人間 (荘鴻、弟、私)	現実の世界 (真の世界 = 生)	生きている人間 (荘鴻、弟、私)	よその世界 (虚の世界 = 謎、虚、「死」)
死んだ人間 (荘鴻の姉)	よその世界 (虚の世界 = 死)	死んだ人間 (荘鴻の姉)	現実の世界 (真の世界 = 現実、「生」)

り手の莊鴻は姉の死を疑っている。三、聞き手の弟と私は莊鴻の姉の死を不思議に感じている。四、外から戻って来たばかりの、莊鴻の姉の物語を聞いていない母と数人の弟は、考え事をしている私を見て、不思議に思う)によって、読者はますます不可解になる。そして、その不思議さを感じた原因を探るとき、自然に莊鴻の姉の死について考える。読者に考えを求めることこそ、冰心がこの小説を書いた狙い目であろう。

冰心はこの小説の中で、莊鴻の姉の死を同情的に描くことにより、教育の権利の男女不平等という社会問題を提起した。冰心は語り手莊鴻の戸惑いをきっかけに、一瞬「真の世界」と「虚の世界」を入れ替える。この入れ替えによって、読者に「なぜ莊鴻の姉が死んだのか」という謎に導く。この謎を解くには、当時の社会状況、社会秩序、社会通念を考えなければならない。冰心は「莊鴻的姉姊」という小説を通して、読者にこれらの問題を考える糸口を作り出したと思われる。

冰心は大学時代、女性問題について熱心に考えた。次にみる「最後の安息」もその系列の小説である。

・「最後の安息」

冰心が1920年に書いた 問題小説 「最後の安息」は、裕福な家庭で育てられた純情で、善良な恵姑と童養媳⁷の翠児との無邪気な付き合いを通して、彼女らのまったく違う人生を比較した作品である。作品に登場する翠児は両親をなくし、わずか4歳で童養媳になるが、10年間のうち翠児は誰からも愛されず、唯一体験したのはいじめであった。一方、裕福な家庭に生まれた恵姑は家族からひたすら愛され、童養媳の翠児の人生と対照的である。

童養媳という慣習は宋の時代に生まれ、清の時代になると非常に盛んになった。郭松義が調査した1724の省、県の中で、561ヶ所(32.54%)に童養媳婚姻が見られる。これは実際の存在数より少ないと考えられる(李中清他編2000:33)。当時冰心は童養媳の人生を問題化しようという意図で、「最後の安息」という小説を作り上げたと思われる。主人公翠児は両親をなくし、わずか4歳で童養媳になる。表7に示すように、両親が亡くなったのが原因で童養媳になった女の子は、全体の5分の1を占める。表8

表7 童養媳になる原因

原因	例	比率(%)
家庭が苦しいため、養えない	25	25.78
両親が亡くなった	20	20.62
母が亡くなり、父が面倒を見ることができない	15	15.46
父が亡くなり、母が再婚した	13	13.40
他の家庭の災難があった	11	11.34
両親は遠くへ引っ越すため、娘を婚約した相手の家に送り込む	8	8.25
男の家の労働力として	2	2.06
喜びごとによって、疫病神を追い払うといいわけし、童養媳をもらう	1	1.03
子供を捨てる	1	1.03
その他	1	1.03
合計	97	100

(出所) 郭松義「清代的童養媳婚姻」(李中清他編2000:36)。

に示すように、0歳から5歳の間に童養媳になるものが全体の半分近くに及ぶ。冰心は翠児が童養媳になる年齢を4歳に設定したのは、当時の社会的現実を反映しており、翠児の苦しみを読者によりよく伝えるためであろう。仮に蒋光赤（1925）が言う「国家、社会、政治であれ（中略）彼女（冰心を指す：虞注）に関係がない」という主張が正しいとするならば、冰心は小説で翠児のような存在を設定できないだろう。

表8 童養媳になる年齢

年齢(才)	人数(人)	比率(%)
0 - 5	227	46.5
6 - 10	121	24.8
11 - 15	133	27.3
16以上	7	1.4
合計	488	100

(出所) 郭松義2000: 45。

瀬地山角（1996: 322）は、「どんなに女性に関して抑圧的に見えるような制度でも、必ず受益者としての女性は存在する。あるいはそうでなければそうした制度が制度として存続することは難しいとさえいえるだろう。『女性を解放する』というもの言いの難しさがここにある」と述べている。「最後の安息」という小説の中で、童養媳は被抑圧的な立場の女性で、姑は「受益者」であり、抑圧する立場の女性である。冰心は社会状況を観察し、作品を通して社会問題の提起、自分のこの問題に対する認識、時には解決法を提示したと思われる。

しかし、この小説の中で、恵姑は童養媳の救済手段を極めて単純に考えすぎた。恵姑は翠児を助けるために、彼女を買って帰ろうと求める。恵姑が翠児を助きたい気持がよく伝わるが、しかし翠児を買おうとす

る行為は、無意識的に翠児を一人の人間として扱ったのではなく、物としてしか見ていない結果に導く。当時、童養媳は将来の夫の家からおい出される、あるいは死ぬ以外に、この婚姻を解消することができなかった。当然夫の家から逃げることも無理である。恵姑の父は翠児の姑が翠児に対するいじめを、「田舎者（翠児の姑のこと：虞注）で教育を受けたことがないから」と解釈し、翠児の姑のような頑固で非情な人がいて、翠児のようなかわいそうで逃げ場も無い女の子が出てくるのは珍しくないと考える。恵姑と父親のような教育を受けたことのある人でさえ、「童養媳制度」の弊害の前になすべき手段がなかった。童養媳の翠児に対する姑の虐待は村で話題になっていたが、誰も姑の行動を止めさせることができず、翠児にただ同情するばかりで、彼女を助けようとはしなかった。それに、村民は恵姑から翠児について聞かれたとき、翠児の状況を必死に隠そうとする。彼女らは誰一人童養媳翠児のことに関わりたくなかったのである。

冰心は1919年8月25日に、北京の『晨报』で「二十一日聴審の感想」（「21日の審判を聞いた感想」）を発表して以来、半年間弱の創作の中で、明るくて、温かい雰囲気（景色）を一度も出したことがない。しかし、非常に情熱的で、温かいイメージを持つ太陽が、「最後の安息」で死んだ翠児の顔を照らした。「外見は貧富と教養とで天地ほどの差があったが、純真な心からの同情と感謝の念は二人の心を結びつけ、愛が溢れ神妙な世界を作り出していた。」（虞2003a: 227）このように、冰心は人間が生まれる家庭環境の差があっても、みんな平等であると考

えていた。彼女は現実社会では、人々はみんな平等であるということが実現できなくても、「極楽世界」では、これを実現するのが可能であると考え、姑に殴られた翠児を「極楽世界」に送る。翠児は死によって、安らぐことが実現できた。翠児の死によって、姑に対する訴えは明確になった。

冰心はこの作品を通して、人道主義の立場から苦しむ弱者への同情を表し、童養媳の肉体的、精神的な苦しみを伝え、当時の中国女性の人権問題を提起した。そして、冰心は小説の中の父の口を通して、姑が教育を受けてないため嫁をいじめる、という問題点を提示する。もしも姑は教育を受けたことがあれば、嫁をいじめなくなるのだろうか。童養媳に対するいじめの解消は、姑が教育を受ければ簡単に解決できる問題ではないと思われる。

しかし、冰心は現実の厳しさを前にしたとき、小説の中の女性主人公を死なせる方向を変えることなく、問題小説 を書きつづける。次に取り上げる「是誰断送了你」も、このような小説である。

。「是誰断送了你」

教育を受けることをきっかけとして、命まで落した女性がいた。これは冰心の1920年の「是誰断送了你」という 問題小説の主人公怡萱である。怡萱の父にとって、女の子は別に勉強しなくてもよい。彼は次のように話している。「そもそも女の子が、外で勉強してどうする。学問は別に大事なことはない、女の子というものは手紙が書けて計算ができればもう十分だ。」中国の男権社会において、女性は「他者」(ポーヴォワール著、『第二の性』を原文で読み直す

会訳2001：9 - 39)と見なされ、中国女性は男性と同じように教育を受けられず、教育を受ける権利を持っていなかった。1904年に公布された近代的学制を提起した「奏定学堂章程」では、女性教育が取り上げられた。とは言うものの、女性は家庭教育の対象とされ、学校教育体系の中に組み入れられなかった。「章程」は次のように述べている。

年若い女性は(中略)西洋書籍を多読すべきではない。(中略)女性はただ家庭教育の中においてのみ(中略)日常使う文字を覚え、家庭で役立つ習字、計算、物の道理、および女のつくすべき道、手仕事に通曉させて、家事をきりもりし、子の教育ができるようにすれば十分である。(舒新城1961：381)

当時中国の少数の先進的な知識人女性は欧米の「男女平等」観念を思想的武器とし、教育の男女同権を宣伝し、女性教育の振興を提唱し、「自由」と「解放」を求めた。1903年4月、日本に留学した女子学生が「女学の衰微を憤り、女権の挫折を嘆き」、愛国的な女性団体共愛会を結成し、11月「共愛会改訂章程」を決定した。その中で、「女学を振興し、女権を回復し、国民の天職をつくすことを根本理念とし」、「中国女性を教育し、女性は才のないのが徳であるという誤った教訓を排斥する」、と宣言した(胡彬夏1903)。1904年の「奏定学堂章程」に続き、1907年「奏定女性師範学堂章程39条」、「女性小学校章程26条」が公布された。それにともない、女子小学堂及び女子師範学堂の設立が認められ、中国女性教育が初

めて正式に学校制度に取り入れられた。

1911年、中国に辛亥革命が起き、上海などで女性軍の組織が始まり、上海に「女性参政同盟会」が成立し、婦人参政権が認められた。1912年1月、女性たちの情熱は参政権運動に転じ、女性軍事団が次々と各種の女性参政権団体に変わった。さらに、1919年「五四運動」が起きたとき、「中華女性救国会」が成立した。当時一部の覚醒した女性知識人は伝統的な封建主義から脱却しようとしていた。「五四運動」以来、旧来の家族制度からの女性の自立は一貫して知識人の課題であった。冰心の 問題小説「是誰断送了你」の主人公怡萱の父は、これらの「自由」、「解放」を求めようとする女子学生は道徳が墮落し、とても軽薄な人間で、彼女らのこのような行動は全く不名誉なことであった。

怡萱は見知らぬ男性から二通の手紙をもらうことによって、運命が変えられてしまった。一通目の手紙は、男性が道路でよく怡萱を見かけ、彼女の成績がとてもよいと聞いて、好ましく思ったこと、二通目の手紙には、怡萱が付き合ってくれることに感謝し、日曜日公園で会う約束をすっぱかさないように、という内容が書かれていた。この二通の手紙は、男性のいたずらに過ぎなかった。しかし、父が二通目の手紙を見つけたために、怡萱は父に怒られ、精神的に大きなショックを受けた。怡萱は最初から最後まで、父にこれらの無実の手紙について、何も弁解しなかった。彼女はただ見知らぬいたずら好きな男性に目をつけられ、手紙を送りつけられたことを悲しみ、自分が運が悪いと落ち込むばかりであった。彼女は自分を理解している唯一の人物は母だ

と思っていたが、しかし母は彼女の心を全く理解できず、手紙に書かれたことが事実だと信じこんだ。母は怡萱の叔父が彼女を学校に行かせたため、娘が墮落したのはすべて叔父の責任であると理解する。横たわっていた怡萱は母の話聞いて孤独を感じ、無実の罪を着せられたことを思い、胸が詰まり、壁の方に向いた。ここの「壁」は当時中国封建社会のさまざまな儒教イデオロギーの象徴であろう。女性は容易にこの「壁」を乗り越えることができなかった。怡萱はとうとう死んでしまう。彼女の命は一枚の紙と同様の重みしかなかった。

冰心はこの小説の最後に、怡萱に学校で勉強するのを勧めた叔父の口を通して、「かわいそうな姪、怡萱、誰がお前を殺したんだ」と読者に疑問を投げかける。冰心は読者に怡萱が亡くなる原因を考えて欲しいと願い、中国封建社会の慣習を改めて考える機会を提供したのであると思われる。

おわりに

冰心の早期の 問題小説 の最大の特徴は、小説の中の女性主人公がしばしば「死」の道に送られていることである。冰心(1922)は、「文学者は最も冷たいもので

人々の涙は彼の収穫である」と言う。現世における死の表現は、よその世界における一種の特殊な生命を表現する形式であると考えられる。冰心は女性主人公たちの死が共に教育に関わっていると理解した。「秋雨秋風愁殺人」の女性主人公英雲は、「包辦婚姻」によって、教育の権利を奪われ、意気消沈して、まるで死人のようになる。「莊鴻的姊姊」の女性主人公莊鴻の姉は兌換券の暴落、教師の給料の遅延、男女不平等が

原因で、教育の権利を奪われ、失意の中に死んでしまう。「最後の安息」の女性主人公童養媳の翠兒は、教育のない姑にいじめられ、死んでしまう。「是誰斷送了妳」の女性主人公怡萱は、学校に行けるようになったが、いたずらな男性から二通の無実の手紙を送られ、両親に誤解されて、死んでしまう。彼女たちはみんな弱かった。封建思想の前で、彼女らは飲み込まれるばかりで、反抗する意欲さえなかった。これらの女性主人公の死は唐突過ぎ、やや不自然な感じがするが、しかし女性の死によって、冰心の女性に対する真摯な敬意の緊迫性はより強調される。死を表現することによって、死に反抗し、死を乗り越え、不滅の希望を訴えている姿勢が読み取れる。

冰心は人々に女性が面している「包辦婚姻」、「男女平等」、「童養媳制度」というさまざまな問題に注目して欲しいと考えている。そして小説の中で、次から次へ「死」の道に送りつけられる女性の物語を見る読者に、女性問題を考えて欲しいという意思が強く伝わる。冰心は女性の「死」を通して、社会問題を考えるきっかけを作った。冰心は1979年5月の『文藝研究』の創刊号で、「从『五四』到『四五』」（「『五四』から『四五』へ」）を發表し、次のように述べている。「これらの小説（「斯人独憔悴」、「秋雨秋風愁殺人」、「莊鴻的姊姊」を指す：虞注）において、私は彼らに与えたものはただ暗くてみじめな、希望のない結末だけである。問題小説の中の主人公はみんな消沈し、憔悴し、憂鬱に陥る。私は彼らにわずかな希望も与えなかったからだ。その理由とは、私はこうした状況にいるのではなかったのです。死から生の方法を深く考える

ことができなかった。しかも私は人民大衆が反帝反封建の主力軍であるということをもまだわかっていなかった。彼らと決然と結合するまでは、私はこの一筋の光明を指し示すことはできなかった」。このように、改革開放が始まったまもない頃、冰心は祖国の新生に喜ぶと同時に、過去の作品が革命との距離が大きいという不安もあった。そのため、彼女は過去の作品を誇張的に批判したと考えられる。

冰心は中国の封建制度の「包辦婚姻」、「童養媳制度」を女性の学校教育によって解決できる、と期待した。これは冰心の理想にしか過ぎなかった。しかし、冰心は小説を通して社会を感化し、人々に社会を改良する勇気をもたせようとした。

冰心は蔣光赤が批判したように、社会性がないのではなく、彼女は早期の問題小説で中国の「五四」という動乱の時期の曲折さを反映している。冰心は終始社会状況を見極めて、作品を冷静的に作り上げていた。冰心にとって、中国社会の処方箋とは、女性教育の重要性、緊急性であった。それはすぐに社会的行動に結びつくほど、直接的な主張ではなかったが、冰心は一人の作家として、社会に対してペンで闘ったのである。冰心の小説は当時の中国の歴史状況に照らし見た場合、反封建の役割を一定程度果たしたと言えよう。

注

- 1 冰心が作家として注目されたのは問題小説「超人」が『小説月報』に掲載されたときと思われる。これについては拙稿2004：44（注14）を参照されたい。

ここで言う冰心早期の問題小説とは、彼女

が1919年、1920年に書いた小説に限定したい。なお、問題小説 の概念については拙稿2004 : 32 - 33を参照されたい。

2 「包辦」とは本来請負うという意味で、「包辦婚姻」とは両親が子供の意見を聞かず結婚相手を決めること。物質的に包辦結婚の基礎をなすのは結婚相手の財産、家柄であり、さらに占いなどの封建的な迷信に影響されるケースもしばしば見られる。

3 例えば以下のような記事がある。

吳虞1917「家族制度為專制主義的根拠論」『新青年』2(6)。

李大釗 1919「万惡之原」『每週評論』30(影印本、人民出版社、1954年。)傅斯年1919「万惡之原(一)」『新潮』1(1)。

4 『大公報』(長沙)で発表された趙女士の自殺についての文章は以下の通りである。(日付順)

「新娘與中自刎之慘聞」1919年11月15日。

沢東(毛沢東)「对趙女士自殺的批判」1919年11月16日。

兼公(龍兼公)「我对于趙女士自殺的雜感」1919年11月17日。

沢東(毛沢東)「趙女士的人格問題」1919年11月18日。

殷柏(彭瑣)「对于趙女士『自殺的批評』的批評」1919年11月19日。

汝霖「我对于趙女士自殺案的主張」1919年11月19日。

「趙女士自殺案的『輿論』」1919年11月20日。

沢東(毛沢東)「『社会万惡』與趙女士」1919年11月21日。

遭君「我对于趙女士自殺的感想」1919年11月21日。

毓瑩「一個問題」1919年11月22日。

平子「我不贊成父母的主婚」1919年11月22日。

柏栄「我对于趙女士自殺的意見」1919年11月22日。

沢東(毛沢東)「非自殺」1919年11月23日。

5 例えば、以下のような記事がある。

康白情「大學宜首開女禁論」『晨報副鐫』1919年5月6日 - 10日。

羅家倫「大學應當為女性開放」『晨報副鐫』1919年5月11日。

羅家倫1919「婦女解放」『新潮』2(1)。

羅家倫は婦女解放の根本的な第一歩の方法は「教育」であり、具体的には「超良妻賢母的な教育」と「男女共同教育」(男女が同じ授業を受ける、男女同校)と提案した。

独秀(陳独秀)1920「(八六)男女同校与議員」『新青年』[隨感錄]8(1)。

6 当時江蘇省は全部で61省、その他の6県は不詳である。

7 「童養媳」とは、女の子がまだ大きくならないうちに、安い値段で息子の嫁として買われることである。女の子の両親は娘を売ることによって、わずかの身代金をもらい、他の子供たちの生活維持費用として使う。男の子側としては、将来の嫁が確保でき、さらに今後の息子の結婚費用を出さなくて済む。買われた童養媳は通常将来の夫より年上で、成人するまでに将来の夫の面倒を見たり、家事の手伝いをさせられる中、姑にいじめられ、非人間的に扱われるのが当時の中国においてしばしばであった。姑と嫁という家庭内の役割を担う女たちは、構造的に、息子、夫に対する愛情と忠誠との葛藤の中に閉じ込められていた。

参考文献

日本語

阿部洋編. 1985. 『米中教育交流の軌跡 国際文化協力の歴史の教訓』霞山会.

阿部洋. 1993. 『中国近代学校史研究 清末における近代学校制度の成立過程』福村出版.

虞萍. 2004. 「冰心の『兩個家庭』 女性と教育の視点から」『名古屋大学中国語学文学論集』16 : 31 - 50.

小林善文. 1986. 「中国近代教員史研究序説 1920年代の中国における初等教員の組合運動をめぐっ

冰心の早期の 問題小説

- て」『東洋史研究』44(4): 128 - 161.
- 舒新城著、阿部洋訳. 1972. 『中国教育近代化論』明治図書出版.
- 瀬地山角. 1996. 『東アジアの家父長制：ジェンダーの比較社会学』勁草書房.
- 陳鶴琴. 1921a. 「学生婚姻問題之研究」『東方雜誌』18(4): 101 - 112. (中山義弘訳. 1982a. 「五四運動期における学生の婚姻意識調査(一)」陳鶴琴『学生婚姻問題之研究』の翻訳)『北九州大学外国語学部紀要』46: 15 - 36.)
- 陳鶴琴. 1921b. 「学生婚姻問題之研究」『東方雜誌』18(5): 97 - 108. (中山義弘訳. 1982b. 「五四運動期における学生の婚姻意識調査(二)」陳鶴琴『学生婚姻問題之研究』の翻訳)『北九州大学外国語学部紀要』47: 15 - 36.)
- 陳鶴琴. 1921b. 「学生婚姻問題之研究」『東方雜誌』18(4): 109 - 122. (中山義弘訳. 1982c. 「五四運動期における学生の婚姻意識調査(三)」陳鶴琴『学生婚姻問題之研究』の翻訳)『北九州大学外国語学部紀要』48: 289 - 311.)
- 中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳. 1995. 『中国女性の運動史 1919 - 1949』論創社.
- ポーヴォワール著. 2001. 『第二の性』を原文で読み直す会訳「事実と神話」(序文)『第二の性』新潮文庫.
- ### 中国語(ピンイン順)
- 冰心. 1919a. 「秋雨秋風愁殺人」『晨報』第7面(北京)10月30日 - 11月3日(発表された時、題名の前に「事実小説」という注があった)(虞萍訳. 2005. 「秋雨秋風人を愁殺す」『火鍋子』63:110-119.)
- 冰心. 1919b. 「我做小説、何曾悲觀呢?」『晨報』第7面(北京)11月11日.
- 冰心. 1920a. 「莊鴻的姊姊」『晨報』第7面(北京)1月6日 - 7日.(虞萍訳2003b「莊鴻の姉」『中国文芸研究会会報』258:2 - 6.)
- 冰心. 1920b. 「最後の安息」『晨報』第7面(北京)3月11日 - 13日.(虞萍、星野幸代[共訳]. 2003a. 「最後の安らぎ」『言語文化論集』XXIV巻2号: 223 - 232.)
- 冰心. 1920c. 「是誰断送了你」『晨報』第7面(北京)1920年9月12日、署名「悲君」.(虞萍訳. 2003c. 「誰がお前を殺したんだ」『中国文芸研究会会報』259:1 - 3.)
- 冰心. 1922. 「繁星」『晨報副鐫』1月1日 - 26日.
- 冰心. 1979a. 「我的故郷」『福建文芸』4、5合期. 底本は卓如編. 1994a. 『冰心全集』7、海峡文藝出版社.
- 冰心. 1979b. 「从『五四』到『四五』」、初出は『文藝研究』1、底本は卓如編1994a: 13 - 20.
- 冰心. 1984. 「我入了貝滿中齋」『收穫』4. 卓如編. 1994b. 『冰心全集』8、海峡文藝出版社.
- 古楫編著. 1936. 『現代中国及其教育：一名中国新教育背景』下冊、中華書局。(影印本『民国叢書』編輯委員会編. 1992. 『民国叢書』第4編42 文化・教育・体育類 上海書店.)
- 郭俊峰、王金亭主編. 1997. 『廬隱小説全集』時代文芸出版社.
- 胡彬夏. 1903. 「祝共愛会之前途」『江蘇』6: 11.
- 黄嫣梨. 1994. 「『秋風秋雨』不是秋瑾所作」『中国文化与婦女』(婦女編) 香港教育圖書公司.
- 蔣光赤. 1925. 「現代中国社会与革命文学」『民国日報』(觉悟)上海、1月1日.
- 李廷幹. 1916. 「危哉小学校教育之前途」(底本は舒新城. 1920. 『教育叢稿』(下冊) 中華書局.)
- 李中清他編. 2000. 『婚姻家庭与人口行為』北京大学出版社.
- 梁啟超. 1936. 「論女学」『飲冰室合集』專集第1冊、中華書局.
- 劉青峰編. 1994. 『胡適與現代中国文化轉型』当代中国文化研究中心集刊、中文大学出版社.
- 羅敦偉. 1920. 「介紹女性工学互助团」『時事新報』1

月24日。(清華大學中央党史教研組編,1979.『赴法勤
工儉學運動史料』第1冊、北京出版社。)
舒新城編,1928.『中國新教育概況』中華書局。
舒新城,1961.『中國近代教育史資料』(上)人民出
版社。
盛英編,1995.『二十世紀中國女性文學史』(上卷)天

津人民出版社。
韵如,1923.『小學教師的生活是什麼?』『晨報副講』
10月7日。
中國科學院經濟研究所編,1968.『中國近代農業史資
料』第2輯。